

田嶋誠一 [著] 『その場で関わる心理臨床』 多面的体験支援アプローチ

評者 ▶ 八巻 秀

「心理臨床はこのままで大丈夫だろうかという危機感が、本書を刊行する最も大きな動機である。」

この田嶋氏の言葉から本書は始まる。著者は、さらに現在の日本の心理臨床の動向に対して、不満と期待を込めて、有名な映画の名セリフをなぞりながら訴える。

「問題は面接室の中で起きてるんじゃない!! 生活の中で起きてるんだ!!」

これまで日本の心理臨床は、密室の中で相談し解決を探っていくという基本原則をもって、発展を遂げてきたと言って良いであろう。それに対して田嶋氏の心理臨床活動は、その原則を越えて、密室から脱して、コミュニティやネットワークづくりを行う。その基本指針が「その場」での心理的支援なのである。さらにそれを支えるシステムの形成（児童養護施設の暴力問題への「安全委員会方式」の導入）も行ってきているが、これらを含めて著者は「多面的体験支援アプローチ」と名付けている。その実践と理論の実例は、是非とも本書とともに、同時期に刊行された著者の編著『現実に関わりつつ心に関わる一展開編』（金剛出版）をお読みいただければと思う。

評者は、田嶋氏のこれらの考えや活動に大いに共鳴しながらも、ふと立ち止まって考えることがある。それは「なぜ田嶋氏は、このような考え方による心理臨床活動ができたのか？」という素朴な問いである。

九州大学の眞賀千賀子氏は「田嶋があらたなアプローチを工夫するのは、それまでの手持ちのアプローチでは応えられないような性質の『切実なニーズ』にぶつかったときである。」と述べ、田嶋氏が「動きながら考え、考えながら動く」やり方に、磨きかけた展開を粘り強く続け、今までになかった仕組みと実践を生み出してきたことを「臨床的プロデュース」と名付けている。まさに「プロデュースする心理臨床」を田嶋氏が行ってきたという指摘は、大いに納得できる部分はある。

しかしながら、田嶋心理臨床を、後進の我々がそのまま「その場」で行うには、まだ何かしら「心許なさ」を感じてしまうのは、評者だけだろうか。この心許なさを田嶋氏のような行動力に変えられるものは何であろうか。

田嶋氏は若かりし頃、国文学者の小西甚一（当時、東京教育大学教授）のもとに行こうと思っていたそうである。（大学紛争のあおりで東京教育大学の入試は中止。田嶋氏は九州大学に行くことになる。）小西氏の名著『古文研究法』（ちくま学芸文庫）の「改訂版のあいさつ」に次のような一文がある。

「『自分の書いた本には、どこまでも責任を持ちたい』という約束に、私は忠実であった。（中略）私は毎年、すこしでも気に入らない所や新しい考えの出た部分があれば、どしどし書き直してきた。（中略）十年にわたって書き直したけれど、私の本にはまだ不備があるかもしれない。だが、良心だけは、ぜったい不備でないつもりである。」

田嶋氏はこの『古文研究法』を「学問というものに誘ってくれた名著」と振り返っているが、この「自らの良心に忠実に書き直し続ける」という小西氏の学問に取り組む姿勢からも、何かしらの影響を受けたのかもしれない。

この『その場で関わる心理臨床』の最終章のタイトルは「くりかえし、くりかえし、その先に」である。もしかしたら、田嶋氏自身も現場において何かしらの「心許なさ」を持ちながら、常に「自らの良心に忠実に」「くりかえすこと」「更新していくこと」を行っていったのかもしれない。そしてこれらの「自らの良心に忠実に」行っていく姿勢こそが、これからの心理臨床に本当に必要な基本姿勢なのかもしれない。本書を読み返して、あらためてそう思う。そして、多くの方々に田嶋心理臨床の基本姿勢を引き継いでいってほしい、そう願う。